

嘉味田宗栄

琉球文学表現論

沖縄タイムス社

嘉味田 宗栄 (かみだ そうえい)

1908年 沖縄県久米島に生まれる

1975年 琉球大学国文学科教授を退官

現 在 沖縄大学教授

現住所 那覇市若狭 3-2-2

著 書 「琉球文学序説」「琉球文学発想論」

琉 球 文 学 表 現 論

1977年11月30日 初版第1刷発行

著 者 嘉味田 宗栄 ©

発行者 真栄城 玄裕

発行所 沖縄タイムス社

那覇市久茂地 2-2-2

印刷所 印刷センター 大 永

製本所 沖縄製本株式会社

装幀・翁長自修

まえがき

三部作のうちの三番目が、やっと陽の目をみようとする。第二部『琉球文学発想論』のまえがきで、表現（受容）を第三部の主題とすと言いきったのは、昭和四二年の初秋であった。いさましいだけの言あげは、実現の日が、思いのほか延びてしまった。

「発想論以後」と名づけるのを適切と思ったり、「琉球文学とことば」とするかねての仮称に、よりゆたかな包括性をみたりした。

だが、第一部『序説』の「概観」、第二部『発想論』の「心意情動の追求」に対し、これは「ことばの一つのありかた」「あやあることば」としての文学、琉球方言文学の「表現の正体をとらえる」ことに、主力を集中するところから『琉球文学表現論』と呼ぶことにした。

本論が示すように、いわゆる、文学発生論、文学史論、語論、受容論への私の一観点も、この『表現論』を本源として始まるからである。

第二部『発想論』を出し、こんにちまでまとめてきた論述を取捨してみたら、一六編がのこった。いずれも、いちおう独立した小論で、執筆の時日にも新古がある。しかも、よくみると、各論がそれぞれ一つの章をなし、第一章から第五章までは基本的な考えかた、第六章は、個々の誦詠・古謡・三味線歌謡その他の形態をとって現象することばの受容とおして、「あや」の表現の正体にせまる一観点、あとの二編からなる第八章は、岩波の『文学』、平凡社

の『沖繩文化論叢』のもとに応じた早書き、などと、おおまかな色わけをみせながら、つらぬくものは一つである。引用の文献と具体例は、つとめて本文で明らかにし、べつに「注」の項をたてる煩を省いた。『序説』『発想論』のやりかたを踏んだのである。こうして、三部作は、どうやら揃ったかっこうとなった。古い稿をふくめ、満足なのが盛られていないにしても、つぎのしごとへの、ひとくぎりとはなる。

音楽芸能に近接する琉球方言文学における先人たちの生きぬくための、切実な心意情動のとのえの、ことばの「あや」の生動は、誦詠・古謡・三味線歌謡・組踊・民話・ことわざなどの諸形態をなす、語・句・文・文章(作品)との、親密なつきあいの進みのなかで、いよいよその感受が深まるだけではない。やがて私たちは、文学一般の「あや」の源泉にも出あう。祖先の生の極限状況ののりこえのちえといふべきが、ついに、こんにちのこの生の内部を、よそことならずゆさぶりはじめる。生・文学の、本源と現象との、つながらずしてつながる、そのせつなるかわりを追っかける私などの、八意式右往左往も、こうしてはてしなくつづくにちがいない。

ここで、ぜひ書きとめておかねばならぬことがある。一般向きでない書き物の出版条件の、いよいよけわしくなっていくさなか、旧師のものした刊行のめどもたななかった文章を、出版にまで漕ぎつけてくれた人々の美しい友情である。新川明、伊礼孝、岡本恵徳、川満信一、儀間進、玉城政美、豊川善一、名嘉順一、中里友豪、仲程昌徳、嶺井政和らの諸氏をはじめ有志のかたがたの善意と助力があつて、とにかく本書は形をととのえたのである。かつては、縁あつて師とよばれる経験をもちえた者の至幸というほかはない。

昭和五二年五月二日

著者

目次

まえがき

第一章 「あや」あることば

一 「あや」と「ととのえ」 七

二 「ととのえ」による表出の型 元

1 曲線型の「あや」 2 屈折型の「あや」 3 倒錯型の「あや」

三 音声表出の「あや」 四

四 文字表出の「あや」 共

第二章 心意強調の「あや」

一 「個」と「集」 一〇三

二 心意強調の「あや」 一〇六

1 語句の成立から 2 呪縛的情動の「ととのえ」 3 想の展開の中途から 4 繰り返しと「ハヤシ」の心意強調

三 個々の歌謡から——官撰オモロを中心に 三六

1 固有の呼称で 2 天空への思い 3 生えぬきの「あや」から

第三章 文学発生論への一観点

信仰起源説をめぐって 一五

第四章 文学史論への一観点

『日本古代文学史改稿版』序をめぐって……………一六

第五章 性状表現の「あや」

一 動詞連用形から成った対語句・疊語句……………二五

1 対語句 2 疊語句 3 動詞連用形による性状体言

二 語末母音をともなう性状体言……………二五

1 容貌の美 2 容貌の醜 3 心性の美 4 心性の醜

三 辞が零表出となった複合の性状体言……………二六

四 性状体言と陳述とによる性状表現……………二六

五 接辞による性状表現……………二五

1 接頭語による性状表現 2 接尾語による性状表現

六 「す」「する」による性状表現……………二六

七 「形容詞」に対応する性状表現……………二六

1 直方言との親縁 2 直方言系統のことばにおける現象 3 連用形「ク」「シク」活の「シ」の正体

第六章 オモロことばの「あや」

一 オモロことば「だ」「だな」など……………二六

二	語論と受容	三〇四
---	-------	-----

三	オモロことば「イ」	三〇三
---	-----------	-----

四	「はりやに」をめぐって	四一〇
---	-------------	-----

第七章 オモロことばと「生」

一	けわい・いそいと「生」	四二九
---	-------------	-----

二	「かくれ」「ぬすみ」	四八三
---	------------	-----

三	「石」への思い	五二八
---	---------	-----

四	「おみき」をめぐって	五三七
---	------------	-----

第八章 琉歌表現の「あや」

一	琉歌の正体	六〇六
---	-------	-----

二	あまえ・ほこりの正体	六四四
---	------------	-----

あとがき

初出誌一覧

第一章 「あや」あることば

一 「あや」と「ととのえ」

主体的言語観にもとづく、ことばの成り立つ条件や、通じあいのはたらく過程、それに、ことばの符牒性・概念性については、拙著『琉球文学序説』の文章その他でたびたび触れてきた。いまは、そのような通じあいの行為としてのことばが、なぜ文学となるかに立ちどまり、考えてみねばならぬ。

太古、生きる主体たちが、身ぶり・表情・動作・叫びなどの無秩序で「思い」を伝えねばならぬもどかしさに、「ことば」という新しい活路を開くようになるには、永い試行と模倣の繰りかえしがあつた。主体たちの内部にあつて、切実、全具体的、全感覚でありながら、伝えるに、混沌としていまだ形をなさず、無秩序に揺れ動く「思い」は「音」のなかだちにととのえられ、はじめて原初の通じあいに達した。

だが、異質の「音」によってととのえられ、うち出されることばの通じあいには、振りはらいのような運命が、世とともにいつてまわるようになる。「思い」という「精神」のはたらきが、「音」という「物質」でととのっていく過程で、いきおい符牒的・象徴的とならざるをえなかったのである。いかに新しい「思い」も、この約束をすっきり破りすては、ことばの自殺に追いこまれるはかはない。おおまかにしか伝わらず、誤解・曲解などのおそれもしぜん付きものとなったことばの弱みには、同時に、意味づけの拡散深化の可能性の約束される強みもひかえていた。ここに、国語教育の必要や、学問研究での概念規定の用意がはじまり、西欧一九世紀末の鋭敏な詩人たちのいたまし

い言語不信の芽もあり、ここに高度な屈折・倒錯・曲線の型の「あや」の表出の無限の可能性は予想され、文学史展開の主たる動因がはじまる。

「音」でととのえられた「思い」は、まず、主客未剖の感動詞となり、うち出されたにちがいない。語は句に、句は節に、節は文に、文は文章に、のびきならぬかわりでととのっていく。ととのえの一音節はリズムの源本をなし、それぞれに、条件による「あや」の発現をとげ、音節群は、種々なる音質に「思い」を乗せ、一、二、三、四、五、六、七、八など組みあわせて展開し、いわゆる、定型、不定型、散文型などの詩形となり、さまざまな名称の形態にまとまる。

「音」による「思い」の「ととのえ」の通じあいの生動のはじまった日の、人々の驚喜の心躍りも、しぜん見えてくる。ことばの靈妙は、言霊へ、ことばの「あや」のうち出しへと、この日すでに動きはじめていた筈である。ことばの夜明けとともに、素朴ながら、人々は、すでに風土に抱かれ、民俗・歴史・社会など遠巻きの条件、彼らの立つ当座の状況にかかわり、ことがらを据え、ことがらへの「思い」の「音」による「ととのえ」のうち出しといった過程をたどる習慣にはいつていた。文字表出はおくれてはじまった。これも、中国において、ことばによる「思い」の表出に参加するまでの永い彷徨があった。しかもひとたび、「思い」の「ととのえ」のうち出しの一過程を占めると、この文字表出は、通じあいを時空にひろげ、表出の適否への反省をうながし、これを推し進めるだけではない。しばしば、内なる「思い」の具体的な表出を阻むことばの概念性・規範性をつきやぶろうと試みる。あとで、実例に及ぶように、現代詩にいたっては、文字表出の「あや」が、詩の生き死にをもきめる。

勿論、文字は言語と密接に関係するものではあるが、言語そのものではない。言語表出の一つの補助的・外物である。

金田一京助氏『国語学入門』の序のことばである。生きる主体の「思い」が「音」ととのえられ、記載言語では、文字でとのえられ表出されてはじめてことばとなるという、主体の生に切実にかかわる通じあいの行為としてことばの正体をとらえる主体的言語観と、これはことなる立場からの発言である。そこから、文学原理論の生まれようはない。が、文学の研究受容に大いに利用されるかぎり、それぞれの観方による成果を手なづけてとりこむ労を避けては、片手落ちの愚をまぬかれぬ。

険しい状況のなかでの「生」の乗りこえに直接する神への切願、性の牽引のひたぶるごろ、水天の青、日出日没の壮観、その他造化の霊妙への「思い」の揺れ、肉親を失う傷みなどと、緊張の強まりにつれ、「ととのえ」は、いっそう高い度合へとつき進み、伝承されずにはおかぬ。そこに、とりどりの「あや」の迫真が動きはじめる。

身ぶり、表情、動作、叫びの表出は、ことばの通じあいはじまりとともに消えうせるのではなかった。ことばの「あや」のうち出しをめぐり、これを強調し、修飾し、生動させるはたらくは、世の移りを追い、いろいろな形で生きつづける。いうまでもなく、ことばの通じあいが文学に成長していくように、身ぶり、表情、動作、叫びの未剖のうち出しは、これまた、それぞれにととのえられて「あや」をおび、舞踊、演劇、歌謡などと、分化発達をとげる。

記紀歌謡のなかの、歌謡劇めいたのは、そのいきさつをみせる。それでも、ことばと所作の表出行為との協調をやめようとはせぬ。組踊の展開で、状況は逼迫し、主人公の激しい心意情動が、一段高く琉歌の音節で詠詠されたあとの地謡の歌が、さらに雰囲気を高めるなどはその一例である。こんにちの話ことばで、「思い」に相応しい身ぶり、語調、表情が、通じあいに痛切にかかわるのはいうまでもない。いまなお、沖縄の年輩の婦人で、突如おとずれた喜びを歌いだすとき、手の舞い足の踏むところが一体となるのも、本源がそこに、ひょっこり現象したのにはかならずぬ。歌謡曲の若い謡い手たちが、ステージで歌うのに、身ぶり表情、むしろ一種のふりともいえるべき作意の所作を

ともなる現象も、昨今著しくなった。度はずれの動きのいやみは別として、本源の一現象としての生動に刮目すべきである。日本古典文学の古代歌謡にみる心意強調のふりは、琉球方言文学の組踊にかぎらず、もろもろの誦詠・古謡の「あや」の表出にも現象していた。

文学はことばの一つのありかたである。

文学はあやあることばである。

は、文学の正体をいうには、舌足らずにすぎるかにみえる。が、いまのところ、内的論理的統一性と包括性をそなえ小気味よく文学・非文学のけじめをつけたことで、これにまさる観かたにめぐり逢わぬ。「自己表出」は文学のことばではない。本質を執念深く追いもとめ、仕事はそこからはじめねばならぬ。文学を「あやあることば」とする発言には、どのようないみがあったか。文学の正体をいう人々が、「ことば」そのものの、「生」にかかわる本質の感知に徹するかわり、表現の一過程にすぎぬ意味作用、即ち「思想」を「文学」におきかえたり、文学を構成体としての言語に宿る美とみたり、或は形態を度はずれに重んじるあまりこれを実体化し、もっぱら、そこから文学を説こうとしたゆきづまりから、本源たることばへと辿りつくための、いわば、窮余の一策をこの発言は開示している。

かつて、文学の研究受容のいわゆる「学派」が、主体の表現受容の行為としてのことばの素性をよそに、個別科学の歴史学、社会学、美学、民俗学などの立場から自己を主張しあってゆずらず、或は外部の成立条件のみ、或は内部の意味作用のみを度はずれにふくらませ、対立が続いていたころ、みずからの立場の確立にせまられ、手さぐりの繰りかえしのあげく、「国語学」における主体的言語本質観からの暗示で、どうやら一のよりどころをつかめた私の体験もいまよみがえってくる。

このような文学本質観の端的なうち出しは、かならずしも、こんにちの論者にはじまったのではない。ことにふれ本源を鋭くとらえた国語学者の時枝誠記、評論家の小林秀雄らの諸氏が、為兼、定家などの先人のことばから「生」に深くかかわる通じあいの行為としての文学の正体を嗅ぎつけたのである。

古人は、たいへんなことを、ずいぶん、さり気ない口つきで、舌たらずに言つてのけたものである。土佐日記の貫之は、歌自慢のキザ男が、船出のはなむけとしてくれた、えんぎでもない歌、

ゆくさきに立つしらなみの声よりもおくれて泣かむ吾やまさらむ

に腹をたて、「いと大声なるべし」と、やつつけている。うっかり、ほめことばにもとれる、歌の本道にふれた痛烈な皮肉である。徒然草の、日野中納言資朝のことばもそれである。上手者でお機嫌とりの西園寺実衡が、さる老人にへつらい、さっそく、「あなたふとのけしき」と、随順の身ぶりよろしくへつらった。「年の寄りたるにて候」と切りこむだけでは腹の虫がおさまらぬ資朝は、後日、むく犬のあさましく老いさらばい、毛のはげたのを、「このけしきたふとく見えて候」と、当の西園寺につきつけた。南北朝公武対立の中の公武両方に尾を振った西園寺、ひたすら北条に抗した悲劇の志士資朝とのけわしい対立といった歴史社会的成立条件をぬきにしては、この舌たらずのことばの毒の「あや」に素通りされるだけでない。事件を、よそから聞いたような口つきで、さりげなくのべる、作者兼好のぶきみな目つきをも、見うしなってしまう。時枝氏は、定家の『手爾葉大概抄』の、「以三莊嚴之手爾葉一、定三寺社之尊卑二」という、実は歌作の要領をさずける比喩の文句から、ユニークな文法論における、表現主体の表現行為にもとづく語分類の「客体的表現」「主体的表現」の正体をよみとった。このことは、山田孝雄氏も、むしろ非学問的だと一蹴した鈴木胤の「言語四種論」の中の舌たらずからの感得にも及んでいる。即ち鈴木の「声なり」「心の声なり」である。この主体的表現としての辞についての、鈴木の内省がもたらした舌たらずを、氏は見のがさなかっ

た。「本源」をもとめてやまぬ国語学者の心熱に、「本源」の方から、正体もあらわに呼びかけていたのである。

琉球方言文学の謡ことばでは、いっそうにぎやかに、この舌たらずの「あや」がふるまっている。『おもしろさうし』の三八、「おりほしかなしけかふし」

一 ねやかりきや、

すと、くに、いちや事、

ねやかりよ、

おもしろよ、ゑめて

又 ねやかりきや、しま中

又 ねやかりよ、

わらてる、いちやる

の「わらてる、いちやる」と謡いおさめる舌たらずなども一例である。「笑てる、行ちやる」を、統一体としての一篇の謡にすえてみれば、その言わんとするところがみるみる言絶えてせまる「あや」となり、私たちの審美的心意情動をやわやわとゆさぶりはじめる。オモロの名人「ねあがり」が、よその部落を通りかかる。たちまち、ファンたちの大群がとりまく。オモロを謡ってくれとしきりにせがむ。人気者の「ねあがり」が、得意の微笑で、鷹揚にうなづきうなづき人山をかきわけていく。それが「わらてる、いちやる」であった。余韻は、果てしもない。

古辞書『混効験集』や「間書」、その他の「原注」などの舌足らずが、いろいろな意味づけられてきたにしても、なお幾多の問題は、私たちの追求感受の徹底を待っている。

いったい、当の舌足らずの説明、「あやあることば」の「あや」とは、「思い」のどのような「ととのえ」のうち

出しであったか。「文」「綾」などの漢語でくくろうとすれば「あや」はどこかはみ出る。「文」「綾」を包摂することばの本源を、注意ぶかく見きわめねば、「あやあることば」としての文学は、たんに、美しいことば、審美的心意情動の表出、つくりかざったことば、などと限定する誤解にからみとられてしまう。時枝氏をはじめ、主体的言語観にたつ人々の目をつけたのは、歌学大系本第四巻にもみえる『為兼卿和歌抄』の、

ことばにて心をよまむとすると、心のままに、ことばのにほひゆくとは、かはるところあるにこそ
の、「心のままに詞のにほひゆく」や、本居宣長『石上私淑言』の、

詞のほどよくととのひて、あやありとうたはるるものは、みな歌なり

の、「あやあることば」であった。いずれも、こんにちの言いかたを以てすれば、「文学」と「非文学」とをわかつそのきめ手に触れている。「ほどよくととのひてあやあることば」と宣長の言ったのは、「心のままににほひゆくことば」につながる。ここで「にほふ」、「ととのふ」、「あや」の正体は、心意のさまざまな拡がりの中にわけ入り注意深く拡散限定すること、とらえねばならぬ。

「にほふ」は、こんにち出廻っている意味では、嗅覚にかかわり、「かおる」「臭気がする」となっている。もと、「丹生ふ」もしくは「丹延ふ」で、赤く美しい色がさす、赤く色づく、さらに赤だけでなく、美しい色にかがやく、などと動いていく。嗅覚の「にほふ」にわたるのは、「ほのかなるものの次第にきざすこと」が本源であるゆえで、視覚でも嗅覚でも、「ほのかなるもののきざし」はとらえられる。人間の感覚が、それぞれに全く孤立して発動するのではなく、からまりあい、ひびきあうからであろう。「連想」といい、「象徴」「比喩」といい、可能の本源はこのへんにもあるらしい。「かなし」が、「愛憐」、「熱愛」の意となったり、「悲哀」の情動を表出したりすることの可能は、「情動が痛切である」という本源にもとづく。琉球方言文学の古謡のことばにも、思いあたるふしが

多い。「とよむ」の語が、「天にとよむ大主」、「月とよむまでの待ちの苦しや」では、視覚で日月の生動がとらえられ、「とよむ中城」などの土地讃めでは、「名立たる」「世にきこえたる」「評判の」となり、聴覚でとらえている。本源は、「発現生動する」、「活力にあふれる」の意にあり、ことばの成立条件による現象の把握のしかたに異同があった。宮古島の「影」は、いつしか審美的意味作用により、「美しい」「立派」となり、古語、琉歌に頻出する「清ら」「チュラ」は、呪禱の心意の「清浄」から、「美麗」「精巧」「善良」「悉皆」へとひろがる。数えあげたらきりが無い。

とにかく、「心のままににほひゆく」は、「思い」が音にととのえられ、ととのえの進みにつれ、あやをなしていくとみるべきであった。「ととのふ」は、動詞としては自他両様に現象する「皆備」「協律」「斉備」などがあてられる。本源は、「乱れを揃え成す」「乱を治む」である。宣長の「ほどよくととのひて」は、表出以前の内なる「思い」の、伝達するには、いまだ「無秩序」、「不安定」、「混沌」を出ないのが「音に乗ってはじめてほどよくととのって」である。「ととのえ」は、ひろく「生」の維持発展のためのいとなみの中に据えてみることができる。「生」は、造化のめぐみが、私たちのために用意した可能性に本源し、たゆまぬ努力で、形をなさぬ無秩序の生動をつぎつぎと、ととのえ、生きるための価値として実現し、身につけていくことではなかったか。葦原の中つ国は、国土発展への可能性の無限の活力にあふれているがゆえに、「混沌」「無秩序」「不安定」で、「いたくさやいで」いたのであり、せつに「ととのえ」を待っていたにちがいない。生の原動力たるメフィストの「無秩序」「混沌」「強烈」な活力は、たえずつとめる「ととのえ」で、神に近づく。「きぎしなきめ」は、死者への悲しみ、復活への呪禱の心意情動、たま鎮めのねがいの激動の「ととのえの造形」のために泣き、死者と自己との思いをやわらげた万葉卷一四の

三三九〇番の東歌、